

世界の著名な特許にみる ————— 第39回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

藤岡市助 その9 日本の電気鉄道事業のはじまり

日本初の電鉄敷設許可申願

日本初の電車運転（第3回内国勧業博覧会）

日本初の商業鉄道開業「京都電気鉄道」

日本遺産・琵琶湖疎水：日本初一般共用水力発電所・重要文化財・

IEEEマイルストーン「蹴上発電所」（関西電力）

関東初の電鉄開業「大師電気鉄道株式会社」（現・京浜急行電鉄）

「小田原電気鉄道株式会社」開業

日本初のエレベーター「凌雲閣」（江戸東京博物館）

世界の電気鉄道技術史（19世紀前半）：世界初の電車・

ベルリン工業博覧会（シーメンス）



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

はじめに

藤岡市助編の連載にて、「日本の電気の父」と呼ばれる藤岡市助が、まず日本初の電灯事業の創設と普及に協力した経緯を述べ、その後、明治23年から43年（33歳から52歳）にかけて日本初の電球事業の創設と経営に尽力した過程を紹介してきました。ちなみに、明治22年（1889年）は大日本帝国憲法が発令した年です。

前号まで、その電球事業における、明治23

年の白熱舎創設から、その後継会社である東京電気が明治38年にGEの資本参加を受けて事業が軌道に乗り、明治43年に藤岡市助が東京電気の社長に復帰するまでの歩みを見てきました。しかし、藤岡市助の活動はこれら電灯・電球の分野にとどまりません。

今号では、藤岡市助が同時期に取り組んでいた日本初の電気鉄道事業の創設と普及、ならびに日本初のエレベーター実現について扱います。

この電鉄もエレベーターも電球事業の立ち

上げ期と重なるものです。藤岡市助が白熱舎を創業し、日本初の浅草・凌雲閣のエレベーターを実現し、日本初の事業用水力発電である京都・蹴上の水力発電所建設に貢献したのは、驚くべきことに、すべて同じ明治23年（1890年）のことであり、藤岡市助の八面六臂の活躍を見て取ることができます。

なお、藤岡市助の電気鉄道への取り組みも膨大なため、今号と次号の2回に分けて紹介します。

1. 電気鉄道事業への意欲

藤岡市助は、電灯の普及と並んで将来性の高い電気応用分野として、早くから電気鉄道に強い関心を寄せていました。近代化を急ぐ日本では、産業・生活・交通など社会インフラの整備に電力を活用することが不可欠であり、藤岡市助は欧米視察を通じて、電気鉄道の技術と事業性に確信を得ていました。

明治19年（1886年）に東京電灯の技師長に就任した藤岡は、電灯事業の調査と並行して、この電気鉄道の研究も進め、日本への導入に強い意欲を抱きます。

藤岡市助の電化社会実現への信念は、やがて日本初の電車運転を実現し、電気鉄道の普及を図り、そうして各地の鉄道会社の創業や計画を後押しするもので、国内の電気鉄道事業の推進役として重要な役割を果たしていきます。

しかし、電気鉄道は電灯事業以上に利権や既存鉄道との調整が絡む複雑な分野でした。そのため、またしても藤岡市助の取り組みは順風ではありませんでした。

今号は、まず電鉄事業開始の導入編・初期編であり、次号は中期・後期編として、波乱の首都圏での電鉄事業、および東京―大阪間の長距離電鉄事業を取り上げることで、近代日本の電気鉄道発展の礎をみていきます。

2. なかなか許可が下りない電気鉄道事業 日本初の電鉄敷設許可願

明治21年（1888年）12月、藤岡市助は、実

業家の大倉喜八郎（連載第31回登場）・久米民之助らと架空単線式電気鉄道の敷設願を東京府に提出しました。これは日本初の電鉄敷設許可願でしたが、時期尚早として不許可となりました。同時期に出された、藤岡市助と事業家の立川次郎らによる蓄電池式電気鉄道事業の出願も却下されています。

当時の交通事業としては、東京馬車鉄道会社（明治13年設立）などが、品川、新橋―上野、浅草を拠点に営業しており、年間約600万の乗客を運んでいました。やがて沿線道路の馬糞悪臭や路面破損が社会問題化しつつも、既得権益も強く、電気鉄道はまだ「詮議」の対象にもなりませんでした。

このため、藤岡市助は、計画の修正を続けて認可を得られる様に努力し続けます。また、明治23年開催の「第3回内国勸業博覧会」の好機を逃さず、日本初の電車運転を実現させることで、世論喚起に努めました。

しかし、この博覧会後も敷設願は容易に許可されませんでした。

そこで藤岡市助は明治26年に、電気鉄道に理解のある著名な実業家である、東京の兩宮敬次郎、梅浦精一、立川勇次郎、大坂の外山修造、京都の高本文平、名古屋の奥田正香らと「電気鉄道期成同盟会」を組織することで、実現に向けて働きかけを強めていきます。

こうした中、明治27年になり、ようやく日本初の電気鉄道敷設の認可が下り、高本文平社長らによって京都電気鉄道株式会社が設立されました。これは琵琶湖疏水事業に付随したもので、日本初の事業用水力発電を利用するものでした。

これを契機に、明治32年の大師電気鉄道（京浜電気鉄道株式会社の前身、立川勇次郎らが発起人）、阪神電気鉄道（外山修造）、明治33年の小田原電気鉄道（吉田義方）、豊州電気鉄道、明治35年の江ノ島電気鉄道など、各地で電気鉄道会社が相次いで誕生していくことになります。